しっかりと踏まえた「楷書」のような青春歌であった。そして、新人賞の受賞作も基本的にはその流れの中で誕生した作品と思う。しかし、「半分の…」の「便器」を「半分のゆでたまご」と表現した比喩の意外性。「宝石箱…」の独特な口語表現を見ていると、武田が近現代短歌との出会いの中で着実に表現者としての歩みを続けていることがわかる。

さらに、第六十回「短歌研究新人賞」では平成二桁世代の台頭も印象に残った。なお、最終選考通過作、佳作に選ばれた平成二桁世代の二名はともに「牧水・短歌甲子園」の出場者である。

・深夜には英文和訳と親睦すポニーテールを結びなおして　**神野　優菜**

・結んではほどいた言葉どうしても自分のものにできない言葉

（『短歌研究』二〇一七年九月号より）

神野優菜（平成十一年生）は高校三年生であり、福岡女学院高校短歌同好会に所属している。掲出歌は同新人賞の最終選考通過作「結んではほどいた言葉」の中の二首。高校生活の中で自分の生き方を模索する清新な作品である。また、神野は会誌『一凛』に作品三十三首を発表している。

・そばかすは天使のキスだと諭されて君の背中に翼を探す

・マグカップ選んで始める冬の夜の数学はまだ苦みが強い

（福岡女学院高校短歌同好会『一凛』より）

掲出歌は『一凛』（二〇一七年三月）に発表された「天使のキス」の中の二首。感覚的な表現が目立つものの安定したリズム感と連作を一つの主題でまとめる構成力に注目した。さらに、神野は「牧水・短歌甲子園二〇一七」において、次の一首で「日向市東郷町若山牧水顕彰会長賞」を受賞している。

・鳥はいつ自分が飛べると知るのだろう屋上に踏み込むときの風

（「牧水・短歌甲子園二〇一七」より）

第六十回「短歌研究新人賞」の佳作に選ばれた狩峰隆希（平成十年生）は大学一年生。狩峰は一昨年に開催された「第六回牧水・短歌甲子園」の団体戦優勝校の宮崎県立宮崎商業高等学校のメンバーの一人である。

・放課後の影伸びてゆく初夏のサビがどこだかわからない歌　**狩峰　隆希**

（「牧水・短歌甲子園二〇一六」より）

・たましいを抱きあげるようにひとがチェロ運ぶ深夜の高速バスで

（『歌壇』二〇一七年四月号より）

・島のひと全てが遠い親戚のような写真集みどりが熱い

（『短歌研究』二〇一七年九月号より）

掲出歌は制作時期順で抄出している。高校生活の一場面を象徴的に詠んだ一首目。「深夜の高速バス」での出会いを鮮やかな比喩を通して詠んだ二首目。写真集の中の「生」の象徴として「みどり」を詠んだ三首目。いずれも表現者としての意識の芽生えを感じさせる意欲作と思う。

最近、ある短歌甲子園ＯＢからは平成二桁世代での短歌同人誌を発行する計画があることを聞いた。これらの動きはどのようなムーブメントを歌壇に与えていくのだろうか。

「短歌甲子園」をはじめとする高校生の短歌大会を通して誕生した若手歌人たちの今後の活動を注視したいと思う。